

死靈

I

埴谷雄高

死霊 I

一九八一年九月八日 第一刷発行

著 者 埴谷雄高

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二ノ郵便番号 二二二
電話 東京(〇三) 九四五―二二一 大(代)表ノ振替 東京八二三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。

© 埴谷雄高 一九八一



定価 一四〇〇円

自序

ここにやっと序曲のみまとまったこの作品について、その意図を述べるつもりはない。けれども、この作品が非現実の場所を選んだ理由については一応触れておきたい。開巻冒頭にこの世界にあり得ぬ永久運動の時計台を掲げたのは、*nowhere, nobody*の場所から出発したかったためであり、また、そのような小さな実験室を設定することなしにこの作品は一步も踏み出し得なかったのだから。

非現実——この言葉はそれ自身多くの問題を含んでいる。私自身の解釈によればこうである。そこは虚妄と現実が混沌たる一つにからみあった狭い、しかも、底知れぬ灰色の領域であって、厳密に言えば、世界像の新たな次元へ迫る試みが一步を踏み出さんとしたまま、はたと停止している地点である。謂わば、夢と覚醒の間に横たわる幅狭い地点である。私にかかる地点を愛する。けれども、また同時にかかる地点から一步も踏み出し得ない自身に私は苛らだつ。私はそこから一步も踏み出したくない。にもかかわらず、私はその一步を踏み出さねばならない。

一種ひねくれた論理癖が私にある。胸を敲つ一つの感銘より思考をそそる一つの発想を好む馬鹿げた性癖である。極端に言えば、私にとっては凡てのものがひややかな抽象名詞に見える。勿論、そこから宇宙の涯へまで拡がるほどの優れた発想は深い感動からのみ起ることを私は知っている。水面に落ちた一つの石が次第に拡がりゆく無数の輪を描きだす音楽的な美しさを私は知っている。にもかかわらず、私は出来得べくんば一つの巨大な単音、一つの凝集体、一つの発想のみを求める。もしこの宇宙の一切がそれ以上にもそれ以

下にも拡がり得ぬ一つの言葉に結晶して、しかもその一語をきっぱり叫び得たとしたら——そのマラルメ的願望がたとえ一瞬たりとも私に充たされ得たとしたら、こんなだらだと長い作品など徒らに書きつづらなくとも済むだろう。私はひたすらその一語のみを求める。けれども、恐らくその出発点が間違っている私にはその一つの言葉、その一つの宇宙的結晶体はつねに髪一筋向うに逃げゆく影である。架空の一点である。ついに息切れた身をはたと立ち止まらせる私は、或るときは呻くがごとく咏嘆し、また或るときは限りもなく苛らだつ。そして、ついにまとまった言葉となり得ぬ何かがそのとき棘のような感嘆詞となつて私から奔しり出る。即ち、*ach* と *pfui!* 私にとって魂より奔しり出る感情はこの二つしかなく、ただそのみを私は乱用する。

このような忌むべき事態は、勿論、私個人の歪んだ能力に由来するに違いない。と同時に、そこには私達が置かれた不幸な位置というものもある。例えば、『大審問官』を読むとき私が肌身に覚えるのはそのような荒涼たる場所である。説き去り説き来つて懸河のごとく弁証する大審問官に対してキリストは最後まで黙して答えない。Die (説き終つた) という言葉が吐かれたとき、キリストはじめて永年の霜を置いたように大審問官の唇にびくりと接吻する。偉大なる憂愁につつまれた大審問官の魂がそのとき雷撃をうけたように震撼する。その魂は確かに震撼せざるを得ない。何故ならキリストの無言の接吻のなかには瞑想と殉教と流血に積み上げられた数千年の歴史が結晶しているのだから。そして、そのとき、私達は知る、『大審問官』の作者の苦悩が如何に深く強烈なものであれ、彼はなお(私達と較べてより強烈に幸福なことには)腕をうちおろせばかちんと敲ちあたつてはねかえる数千年の堅固な実体の上に支えられていることを。もしこの私達が一つの底知れぬ重味をもつて沈黙しつづけるキリストを描くとすれば、その作品中に数千年にわたつて積み上げられた歴史をも創り出してみせねばならない。それは疑いもなく不可能である。私達は巨大な幅広い人類史のなかに投げこまれた一匹の哀れな鼠のごとくにデモクリトスからヘゲルへ至るまでの膨大な積荷の間をちょこちょこ囓り歩いた。けれども、一つの積荷からぼろくずをひきずりだすごとくに忽慌とつつ走り、一つまみの断片のみを口に含んで踊つた私達はいまだにその一つ一つの味を詳らかにせぬ。私達は

ちやちなソクラテスであると同時にちやちなソフィストの徒であり、一瞬合理的でまた一瞬非合理的で——要するに單純素朴なてんやわんやなのであつて、一貫せる論理的思考の持続にはとうてい耐え得られぬというのが私達の精神の位置である。けれども、私達の不幸は私達が嚴然確固たる実体の上に立脚していないことなのではない。もし私達が風のごとき気分のみにまかせる單なるてんやわんやの徒であるならば、そこにはまた不幸な事態も幸福な境地も何ら問題になり得ないだらう。私達にとつての不幸は、私達がその發想を最後までつきつめ得ぬてんやわんやの徒であるにもかかわらず、なお私達に一定の受容能力が備つていて——これが私達を未來へひきずりゆく不幸である。

それは前へひきずりゆく不幸である。苦難な未來へ踏み出さなければならぬ不幸である。とうてい動かし得ぬ手足をなお動かさなければならぬ不幸である。私個人についていえば、私は『大審問官』の作者から、文學が一つの形而上學たり得ることを學んだ。そして、その瞬間から彼に睨まれたと言ひ得る。私は彼の酷しい眼を感じる。絶えざる彼の監視を私は感ずる。ただその作品を読んだというだけで私は彼への無限の責任を感じざるを得ないのである。それは如何に耐えがたい責任であることだらう、とうてい不可能な一歩をしかも踏み出さねばならぬということ。私はついにせめて一つの觀念小説なりともでつち上げねばならぬと思ひ至つた。やけのやんばちである。けれども、その無謀な試みの如何に羸弱なことであるだらう。例えば、私がこの作品中に扱つた『虚体』という馬鹿げた觀念をとり出してみてもよい。この僅か一語に到達するためには、私には私なりの苦勞がなかつた訳ではない。けれども、ひとたびその語が白紙の上に書き下されてしまえば、それは他のさまざまの觀念のなかに泡のごとく消え失せてしまつてもはや跡形もない。微風のなかに揺れている一本の枯れた樹ほどの持続する表現力も持ち得ないのである。重味なき觀念のもろさである。とはいへ、私はその脆い碎けた場所から出發せねばならない。

このような荒涼たる場所に置かれたとき先人達が如何なる方法をとつたかを見たとき、私には一つの姿勢が目にとまつた。そこにはさまざまな型があり、或るものはそこで地上に密着する蘚苔植物的に生きのびて

いたが、或るものははじめから枯死の擬態をとって立っていた。擬態——そうである。特殊な風土のなかにとにかく一本の樹幹を延ばした形で立っているその姿勢に擬態という名称を附して恐らく誤りではないだろう。死んだ真似でもしていなければとうてい自身が持ちきれなかった彼等の精神に深い興味を覚えたばかりでなく、遺憾なことには、私はそうした姿勢に親近性のみ感じた。そうである。それは遺憾な親近性であった。何故ならベェコンによって既に数世紀前に撃破された洞窟の偶像がなお私達の裡にとぐろを捲いているのを私は感じたから。けれども、ということはまた同時に、うまく死んだふりをしてみせる隠れ簀を私自身たとえ神の目を盗んでも案出すべきやけのやんばちな衝動を感じたということもまったく同じことであった。その遺憾なやけのやんばち的心情の分析にはここではたちいる必要もない。私が敢えてここで触れたいのはその結末の姿勢だけである。その結果、私がとつたのは次の三つの方法なのであった。即ち、極端化と曖昧化と神秘化——。

前述したごとく私には一種ひねくれた論理癖がある。せめて徹底出来るところまで踏みこみたい。もし不可能ならば、ごまかしてでも通りぬけたい。ごまかしが見抜かれてもなんとか灰色のヴェールをかぶせておけ。以上が私を支えている体系である。こんなたよりない中世の呪術的方程式に従つてとにかく私流の一貫性を保っているのが、私の示し得る唯一の姿勢なのであった。明晰と厳密——いまだ私の精神を飾っていないその協和音を渴求していない訳ではないけれども、この場合、あとに並べられた二つの方法は謂わば比較的單純な擬態法であつて殆んど説明を要しない。つまり、作中随所に見られるごとく、*disso*の濫用、反覆の濫用、或る期間までの心理描写の省略、探偵小説的構成等々々。けれども、第一にとりあげられた極端化の方法については、非現実の場所をこの作品が発する場所と述べた以上その大要を説明しておかねばならぬ。一般的にいつて、思考は本来事物の根源と極限へまでひたすら辿りゆくものであるから、敢えて極端化と呼はずとも、思考本来の道行きをそのまま辿りゆけば、屢々、いわゆる思考^{ゲダンク・エクスプレメント}、実験^{エクスプレメント}の領域へまで踏みこむに至るのだろう。私のひそかな願望はかかる実験をここで行いたいということのみにかかっている。けれども、ひねくれたちやちな論理癖しかもたぬ私はただ私流の極端化の原則を歪んだ形で貫ぬくばかりで

ある。屢々私が行かうそれは、もしそういつてよければ、妄想^{ヴァン・ファンタジー}、実験^{エクス・ペリメント}の領域に属すると規定して好い類のものである。そうである。そして、それはそれ以外の何物でもない。そして、このような愚かしき無力な実験遂行の故にこそ非現実の場所から私は出発しなければならなかったのである。

嘗て耆那教の聖典に接したとき、私には一つの奇妙なヴィジョンが浮んだ。耆那教とは印度古来より現在までもひきつづいている戒律酷しい一教団であつて、嘗て私が述べるような事実など存しなかったが、私は私自身の法則に従つてその素朴な教儀を私流の領域へまで極端化してみたのである。そのとき浮び上つてきたヴィジョンとはこうである。その教団はその頃餓死教団といわれていた。着ること飲むこと食うことはおろか呼吸すらその信徒達は禁ぜられていた。従つて、教団の信徒達が集り籠っている或る高山へ登りゆくと、その途上の此処彼処にミイラ化し或いは風化したひとびとの屍体が無数に見受けられた。けれども、如何なる理由によるのか、該教団の始祖大雄のみは深く暗い洞窟の奥にその瞑想的な眼を光らせて生きていた。菩提樹の下で釈迦が正覚し無窮の碧空を眺めあげたとき、ふと想ひ出したのがこの大雄である。(事實上に於いては彼等の年代は遺憾ながらややずれていて彼等は互いに相知らなかつたが、私の極端化の法則はここでも時間的、空間的な事実の拘束など無視する。)ヒマラヤに似た美しい白い雪をかむつたその高山へ辿り着いた釈迦は深く暗い洞窟のなかへ大雄の前まで静かに進んでゆく……。これが私のヴィジョンの出发点である。この釈迦と大雄の對話の章は作中人物が語る一つの物語としてこの作品の最後近く現われる筈であつて、この作品全体の觀念の中心をなしている。この作品が非現実の場所から出発するといふとき、その設定には、登場人物達がフィルムの陰画のごとく暗く処理されるという意味も含められているのであるが、かかるネガティブな作中人物達の中心に坐っているのが全否定者大雄なのであつて、彼等は彼の觀念の部分それぞれ担つて歩いているに過ぎない。

さて、そうであるとして――。

宇宙の涯から涯へまで響きゆく一つの巨大な単音の幅を検証すること、それは確かに一つのヴィジョンに他なるまい。それは確かにあらゆる先人達をひきずり歩ませた一つの光源に他なるまい。けれども、もしこ

の光栄ある用語があまりに暗過ぎる私の領域に似合わしからぬとすれば、私は私自身の用語をもって、それを一つの架空凝視と名づけても好いのである。私の魂は、広大な真空の一点にはたと立ち止まる。私は、架空を凝視する。そして、そこに行われる一種の精神の体操、私はここに設定された小さな実験室がもつ意味をそれ以上に予定していない。巨大なサイクロトロンやダイナモが旋回する現代、ものものしいランビキやフラスコを গত ごとと並べたてて効果零の古ぼけた錬金術にとりかかった以上、その他につけ加えるべき意味などあり得ないのである。

私が本巻を序曲と呼ぶ理由は、てんやわんやの息切れする能力をもつてとにかく三つの主導音をここに敲ったというだけの理由である。第一から第三主題の展開へいたるまで。だが、まだ何事もはじまっていないのである。この作品が扱うのは五日間の出来事であるが、だからだと長いスタイルで書きつづけているため、この序曲を終ってようやく第一日目の夕方まで達したに過ぎない。徹夜など気にもかけず飛びまわっている作中人物達の気配を窺い看るとき、前途の遙かさにいささか恐慌の情を禁じ得ない。

(昭和二十三年十月真善美社版)

目次

自序

一章 癲狂院にて

二章 《死の理論》

三章 屋根裏部屋

装帧
辻村益朗

死
靈
I

悪意と深淵の間に彷徨いつつ
宇宙のごとく
私語する死霊達

最近の記録には嘗て存在しなかったといわれるほどの激しい、不気味な暑気がつづき、そのため、自然的にも社会的にも不吉な事件が相次いで起った或る夏も終りの或る曇った、蒸暑い日の午前、××風癪病院の古風な正門を、一人の瘦せぎすな長身の青年が通り過ぎた。

青年は、広い柱廊風な玄関の敷石を昇りかけて、ふと立ち止った。人影もなく静謐な寂寥たる構内へ澄んだ響きをたてて、高い塔の頂上にある古風な大時計が時を打ちはじめた。青年は凝々と塔を眺めあげた。その大時計はかなり風変わりなものであった。石造の四角な枠に囲まれた大時計の文字盤には、ラテン数字でなく、一種の絵模様が描かれていた。注意深く観察してみるならば、それは東洋に於ける優れた時の象徴——十二支の獣の形をとっていることが明らかになった。青年は暫くその異風な大時計を眺めたのち、玄関から廊下へすり抜けて行った。

この青年、三輪与志が郊外にある××風癪病院を数度にわたって訪れなければならなくなった用件というのは、彼の嘗ての親友で、またその後、兄の知人ともなったらしい或る不幸な、孤独な精神病者の委託に就いてであった。幸いなことに、この病院に勤務している一人の若い医師が、三輪与志の兄三輪高志の学生時代の顔見知りであったので、患者の委託についてさまざまな便宜をはかってくれたばかりでなく、進んで患者の担任をすらひき受けてくれたのであった。

その不幸な精神病者は、やはり郊外にある或る刑務所のなかで、不明瞭な原因から急に狂気の徴候を表示

したものである。狂気の徴候を表わしたといっても、見廻りの看守に発作的な暴行を加えたとか、なにか妄想に憑かれて曖昧な言葉述べはじめたという訳ではなかった。昔から黙りがちな青年であったが、その刑務所へ送置されてから次第に深い沈鬱状態に陥り、遂に全くの無言状態をつづけるに至ったといわれている。それは一種の言語喪失の症状なのであるが、通常の健康状態を保っていた以前から沈黙がちなもの静かな青年であっただけに、何時頃から彼を発狂者として認定すべきか、書類作成に際して担当係員も少なからず困惑したとのことであった。

彼の狂気がはじめて問題になったのは、或る蒸し暑い日の午後、温厚な人格者であると評判されていたかなり老人の刑務所長が未決囚達の房を各個に見廻つて、暑さへ向つての健康について二三の注意を与え、未決囚達の独居生活を元気づけて歩いた際、彼がその老所長に対して失礼な振舞いをしたことから端を発したといわれていた。然し、温情をその全生涯の標語としてきたという老所長を無視したような粗暴な言動が示されたのではなく、老所長が独房内に端座している彼に丁寧に話しかけたとき異常に噛いはじめただけだという話もあった。しかも、この停年前の老刑務所長はあまりに穏やかすぎでなにかしらからかつてみたくもなる人物だとの噂も他方にあり、彼は黙ったまま奇怪な様子で嚇しつけたのだと、真実らしく述べる者もあった。

これらの話は、三輪与志が、仮釈放される兄の荷物を待合室まで運んできた雑役夫達から聞いたのである。とにかく老所長の訪問に際して事件があったことだけは確かであった。老所長は直ちに担当看守を呼びつけ、このような状態に至るまで無責任に放置しておいた怠慢振りを叱ったそうである。三輪与志が看守長から聞いた話によると、老所長はその場から自ら医務室へ赴いて、「国家から保護を委託されている大切な人物」について、医師達と心からなる相談をこらしたとのことである。医師達の診察が行われると、しかし奇妙なことに、一人の医師が、彼には失語症の傾向もまた重い気鬱症の徴候も認められず、全体としてなら発狂の症状はないと、強硬に主張したそうである。それなのに、如何なる理由でか、彼はやがて刑務所内の一病舎へ移管されたのであった。一年以上の長い期間其処へ放置されていたのであるが、彼がその病舎で

いかなる扱いを受けていたかは明らかでない。

此処で注意して置かねばならぬことは、やはりその同一病舎に病臥していた三輪与志の兄三輪高志が、病状の進行の結果、執行停止となり仮釈放されたのが、不幸な精神病患者、矢場徹吾がその病舎へ送られていたその期間内であったということである。

さて、三輪与志と矢場徹吾の関係についてちょっと説明しておこう。

矢場徹吾が高等学校を去った理由には、やや不明瞭なものがあつた。学校当局がその事件に対し処置した決定は恐らく正当であつたろうが、失踪に際しての矢場徹吾の心理が説明したいものであつた。

或る秋の午後であつた。町から学校の寄宿舎への帰途、黄ばんだ葉々をつけた樹々の密生している公園の境にさしかかつて、三輪与志と矢場徹吾はふと佇んだ。動物がそれによつてなりたつているような気味悪く訴える低い、地を這うような締めつけるような、唸り声が公園のなから聞えてきた。二人は重苦しく顔を見合わせると、既にかんりの人々が足を止め、粗らかな円をつくっているその場へ近づいて行つた。

クレチン病を患つて畸形に発達した子供にこんな風貌があるといわれる。一瞥しただけで、奇怪な印象を受ける子供であつた。頭から眼、鼻、口、さらに軀幹と、その凡てが正常な釣合いがとれぬというより各自がそれ自身の奇怪な個性をもつて勝手に発達しきつたふうに見える……。愚鈍と一瞬にして深く印象されるが、それにしてもなにか厭らしい不気味な後味がそこに残つた。そんな子供が一匹の大きな老犬をむごく扱っているのであつた。

まだ六つ位にしか見えなかったが、痙攣するような激しい力で、殆んど自身と同じ背丈の大きな老犬の耳をひっぱつていた。その子供は苔のたまつた白っぽい舌を垂れていた。そして、老犬の苦しい唸り声が奔るような悲鳴へ高まると踊り上つて嬉しげにその両足を踏みしめた。そんなとき、その子供の鈍い瞳は生き生きと光つてさえ見えた。哀れな老犬の哀れな耳朵は、ちぎれるばかりに張りつめられていた。しかも、耳朵の上部に赤黒い皮膚病のかさぶたが一つの乾いた隆起を形造り、哀れな老犬の衰れた風体を、さらに悲惨にしていた。その老犬は、このような苛酷な扱いに日頃から慣らされているのか、何時までも、凝つと身